

粟国島のトゥージ

上江洲 均*

はじめに

昭和43年3月、はじめて粟国へ渡った時、まづ、水を溜める容器のこと興味をおぼえた。どの家にも2個や3個はあるトゥージが、その後も気になる存在に思えてならない。島を訪れる人は、誰でも一度はこのトゥージに注目する。筆者もまたその一人で、その後拙稿の中にも少しばかり紹介したことがある。

今回久しぶりに訪れて、これらのトゥージに再会した。今回は一歩進めて、これらのトゥージの戸籍づくりを心掛けてみた。限られた調査期間中に、せめて字東の全家庭の記録を取ってみたかったのだが、なかなか困難な仕事で、空家、空屋敷を含めて67戸、それに字西の数軒の記録を合わせて取るにとどめた。

その結果、67戸の総計では、トゥージが102個、ウストゥージが4個、ンムアレートーニが14個、豚のトーニが2個、イチが10個あがつた。合計130個である。これらの可能なかぎりの実測をし、数個については実測図を作成した。

それは、トゥージの平均的な大きさを知るた

めである。これについては、次項で述べる。

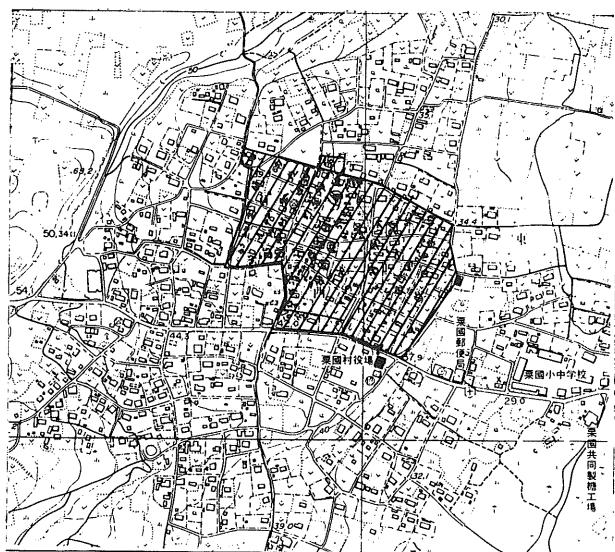
トゥージについて

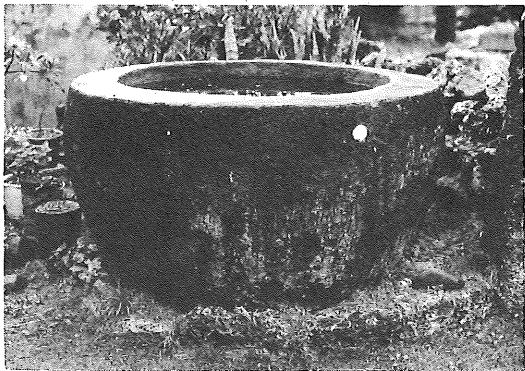
トゥージは、飲料水用の容器のことである。語源ははつきりしないが、チュージ(手水鉢)の転化ではないかと考える。手水鉢とでは、ものがちがうが、形や扱ううえでは似たところがないわけではないのだから、おそらく名称の転用だろうと思う。

トゥージとウストゥージは形は似ている。口径より胴径が大きく張り、底は口径よりさらに小さい。丸みを帯びた茶碗のように見えるが、本当は何をかたどったのだろうか。ウストゥージは、海水を溜めおくトゥージである。海水(ウス)は、特に豆腐づくりになくてはならぬものだった。ウストゥージは、小型の水用トゥージとは見分けのつかないものであるが、一般的に口径約60cm、高さ約40cm前後のサイズをいう。それ以上の大きいものは、水槽のトゥージと考えてよいと思う。

図1 粟国集落図

(斜線部分が調査完了部分)





トゥージ2石4斗入という大物(一覧表67番)

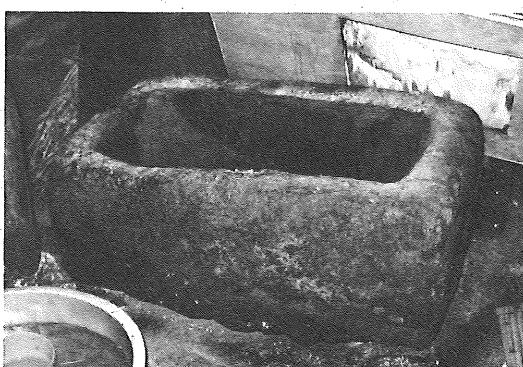
102個のトゥージのうちで最大のものは、福本家のもの〔口径137(内径110)、胴径149、高さ88(深さ65)〕、新里家のもの〔口径139(内径105)、胴径145、高さ79〕等である。小さいのでは、口径67、高さ54である。これらのトゥージの平均値を出してみると、トゥージのおおよその形が浮かび上って来るにちがいない。

口径97cm(内径74cm)、胴径108cm、

高さ67cm(深さ49cm)

これが平均値である。横に幅の大きいタイプである。口縁は、平均12.5cmの厚さ、底部は平均18cmの厚さである。

ンムアレートーニと豚餌用のトーニは、四角ばったつくり方である。ンムアレーは、サツマイモを洗うためのもので、台所附近において、足を踏み入れて洗う。この14個の平均値は、たて52、よこ79、高さ30(深さ21)である。厚さは平均8、底の厚さ9である。



ンムアレートーニ

豚餌用トーニは、これに形はやや似ているが、小形である。たて33cm、よこ45cm、高さ15cmである。

イチは池のことと、四角ばったものや橢円形のものがある。高さは平均32cm、たて85cm、よこ150cm、深さ20cmである。家の東側の庭に置いている。トゥージのように生活用品ではない。かなり生活に余裕のある家でなければ持てないもので、島でもかつて、裕福だった家に見られるものである。

粟国は水に恵まれず、そのため水の問題は深刻であった。遠くの泉から汲んで来たが、いつか村近くに溜池を掘って、そこから飲料水を汲んだ。その水を日に何回も往復して汲み、このトゥージに入れておいて使った。水を確保しようとする村人の必死の気持ちがひしひしと迫ってくる。



一覧表49番にあった池(87×141、h 34)

トゥージの製作

トゥージは、コーシチまたは、コーシチャと呼ばれる石質で作る。コーシチには、シラクチャとトゥージイシがある。シラクチャは、もうないのでむかない。トゥージイシは灰色がかり、中に小石が含まれており、専門用語で角礫凝灰岩というそうである。この石は島の西海岸に堆積しており、波打際に上から落ちて来た岩を彫ってつくった。製作に関して専門家がいたかもしれないが、それにについて記憶する人が見つけ出せず、詳しい記録をとることはできない。大正のころで、製作はとぎれているので、製作に関しての伝承者はもう探し出せないのだろう。

製作に使った道具は、ティブクという道具た

だ一つであった。今では、その道具も見られない。ティブクというのは、一般には畑で使う小農具である。これを区別するために、小農具の方を「ティブクグロー」といった。

ティブクは、ウキーダイという犁の刃のつくり方にやや似ている。ウキーダイの先が尖っているのに対し、ティブクは、平刃である。このティブクで、墓づくりもする。栗国の墓は、このコーシチ地帯での掘込式で、長年月をかけて掘りこむつくり方である。

ティブクには、もう一つの用途がある。ソテツの幹を伐採するときにも使う。これは実と共に食用である。現在では、ソテツを食用に供することもなくなったので、道具も急速に見られなくなった。

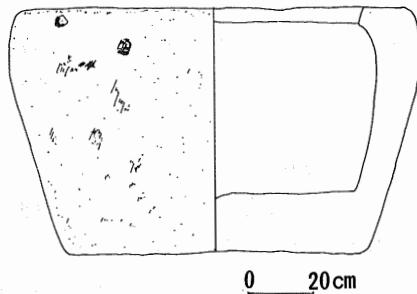


図2 トゥージ実測図(口径120、腹径126、高さ75)



図3 ティブク想定復原図

トゥージの運搬

トゥージは、浜で形をつくって、それを運ぶ。小さいシムアレートーニなら、2人ないし6人用である。しかし、大きなトゥージともなると、50~60人はふつうで、100人の人を動員することがあった。これは前もって、運ぶ人を頼んでまわった。いわゆるユイのようなもので、都合のつけられる人は参加した。

新里正清氏は、明治35年生で、今年78歳である。20歳のころ運んだ経験のあるひとりである。そのトゥージは、大田という家のもので、大きいものに属する。(口径123、内径92、腹径132、内径102、高さ86(深さ64))。[写真(12)]トゥージの上に2本の丸太を平行に横たえ、縄でくくる。小さなトゥージの場合は、大竹の棒を使うこともあったが、大きいものは、丈夫な丸木材を用いた。丸木材も1人では持てないので、2人でかつぐほどで、長さは4間ほどあったという。

縄はシュロ縄かアダナシ縄が主であった。アダナシの場合、6尺ほども伸びたヘニという根を探って来て大綱をつくることもあった。

トゥージの上に棒を平行において縄でしばった。棒がトゥージに接するあたりは、そのままだと傷がつくので、アダンビーチャーというアダンの幹の枯れものを敷いてクッションにした。太縄を2本交差状に置き、その上へトゥージを載せる。縄の先は棒に持つて結ぶ。縄がずれないように、胴にも縄をつける。2本の棒が動くおそれがあるので、2本の間も横棒を差して固定する。

小さいものは、1日で家まで運び入れることができたが、大型はそれができず、現場から、ヤヒジャのところまで運び、坂道の下へおいて1日の仕事を終えた。翌日トゥマイガービラというその坂道をのぼり、家まで運んだ。持ち方は、肩を入れて2本の棒をかつぐ。この場合一部の人たちは側において、交代要員とした。その人たちは横から縄を支え、またつきつぎ交代にまわった。

トゥージの製作はわりあい自由な時間にやつたが、運搬に大動員をかけるのは、旧暦10月から4月までの農閑期を利用して行われた。4月には「山留め」といって、このような仕事をすることを許可しない期間があって、その間だけはきびしく止められていた。また昔は道が小さく、運ぶのが困難であった。しかし、運搬時にかぎっては、農道周辺の畑に入れてもよいことになっていた。

浜の村では、2艘の舟を使って、水の上に浮かして運んだが、字東・西のアギの村でも、時には浜部落経由で運ぶこと也有った。坂がゆるやかで、多少楽だったからである。

このトゥージの運搬は、大へん難儀な労働で、士気を鼓舞するために、女が列の前で太鼓を叩いた。あるいは、指導者格の男子が、トゥージの上に乗り、拍子をとることもあった。

運んだ夜は、その家で夕食をとることになっていたが、取り立ててごちそうということもなかった。イモと豆腐であったが、人数が多くなれば、それでも大へんだった。その時ミチというものをつくって皆にふるまつた。ミチは、イモを原料とし、こうじはタンナー(ソテツの実)でつくったものだった。甕の中に20~30日ばかり仕込んだものであった。

トゥージの製作運搬も大正の頃まで、昭和に入ると切石によるタンクがつくられ、やがて、鉄筋コンクリートによるタンクにかわった。切石積みは、間をセメントで密着したものである。セメントの調合も今ならば、セメント1に対し、砂2、砂利3であるが、初期のころは、1:3:6というひどいものであった。工事請負人は、那覇で道路人夫をしていた人で、その経験を生かしたのであった。昭和7・8年ごろには、10軒で1基の割りで補助があり、大きいタンクをつくっていた。これにはろ過装置をつけたのもあり、屋根も赤瓦が普及したので、屋根からの取水がふえていた。

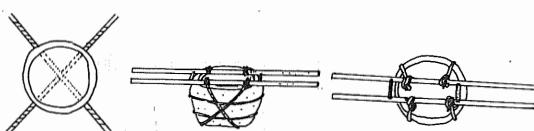


図4 トゥージ運搬想定図

水汲み

水汲みは女の仕事である。桶を頭にのせて何回というように運んだ。水を汲み入れるのは、



西海岸の凝灰岩の断崖

(中心にトゥージウサーラの岩が見える)

クバの葉でつくったツルベであった。

字西の西方に広くかこった水溜りがあるが、これをイキントーガーといい、以前は野菜洗い等の洗場であった。その西方に上から順にナガガード、上ンカー、ナカンカー、大正ガードがある。ナガガードはヌルガードともいわれた。一番下に下ンカーがあったが、これは大正ガードといっしょになった。

これらの井戸の周辺で、牛馬をつなぐことが禁じられ、犬の飼育も水を汚すという理由から禁じられた。溜池の水が枯れると中の泥を掘り、そこへ浸透して来たわずかばかりの水を汲み取ることもあったほどで、水の苦勞は絶えなかった。

古い井戸としては、洞穴になっている所がよく利用された。「アサキンエー」やマハナの東にある「トゥンヌエー」、それに北の「ウカハ」等である。現在は、シムクという所と学校の前の2ヶ所でボーリングをし、水道の水を取っている。その前は「ヤマトガード」からタンクへあげた。

赤瓦の屋根から取水するところから、セメントや漆喰をつなぎとした切石タンクの出現となつたことは前にも述べた。なお、木の幹からの取水もあった。福木から取った水は、苦いし、ゴミがあるのであまり好まれなかつた。ガジマルや桑の木はよいとされた。

むすび

トゥージも一度だけ受難の時代があつた。終戦直後、米軍が駐留したとき、非衛生的などの

理由で割ったことがあったという。しかし、現在残っている数の多いことから考えれば、ごく一部だったのだろう。あまりに多いので、割ることを諦めたものか、水の不便な島ではやむをえないと思ったものか、どちらかだろう。

現在もタンクの傍らにあって、あるいは空屋敷でも空家でも昔の通り置かれていて、目立つ存在である。空家の位牌と共に、かつての人間の生存を証明づけている、と思えてならない。と同時に、これらのトゥージが、無言のうちに自らの存在を主張しているように思われるのである。

なお、角礫凝灰岩による民具は、ほかに「チンカマ」(チンカナという人もある)と称するかまどがあったということであるが、現在は残っていないものらしく、ついに見ることができなかった。

伝承者 仲里秀雄(明治32年生)

上原英昌(明治42年生)

新里正清(明治35年生)

豊村幸徳(明治39年生)

棚原オト(明治41年生)

「トゥージ」一覧表

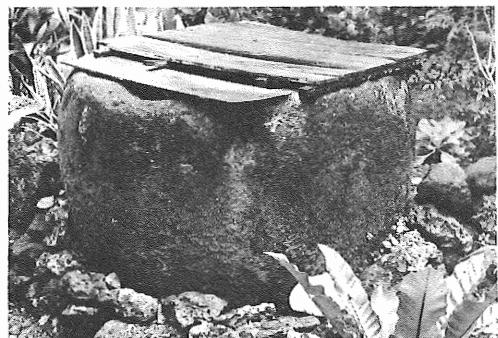
* 単位はすべてセンチメートル。
番号は戸数通し番号を表わす。

	口 径 (内径)	胴 径 (内径)	高さ (深さ)	備 考		口 径 (内径)	胴 径 (内径)	高さ (深さ)	備 考
1	88.1(66)		59(38)	空家		74(54)	86	65(47)	東265, " (修理)
2	110(77)		77(50)	底径80, 空家	18	112(84)	124(98)	74(55)	東272, 赤嶺フジ子
	96(71)		70(47)	底径77, "					
3	80(68)	92	68(47)	空家	19	130	142	80(63)	東263, 仲里慶助
4	87(68)		62(48)	空家	20	121(91)	130	80(59)	東260, 赤嶺信雄 (1石5斗入)
	110		65	ワレ, "		110	122	76	"
	120(86)		75(57)	底径91, "		86	91	66(52)	"
5	107(83)	117	65(47)	空屋敷	21	110(95)	111	72(51)	空家(赤嶺)
	88(67)		65(56)			70(50)	80	58(47)	"
6	77(61)	87	59(45)	東221, 玉寄マツ		76(55)	83	57(41)	"
7	97(76)		56(43)	ワレ, 空家	22	110(83)	117	70(58)	底径100, 東51 新城商店
8	105(76)	115	74(49)	空屋敷	23	67(57)	74	51(35)	東277, 新里松藏
9	92(71)	96	64(41)	住む		103(82)		67(50)	"
	80(59)	83	46(35)	"	24	84(68)		50	ワレ, 東278, 宮里盛繁
10	76(58)	88	64(48)	東375, 上原平次	25	106(76)	115	(51)	新垣(現宮里)
	73	80	54(36)	"	26	86(64)	101	77(54)	東23, 仲里スエ
11	90(71)	98	64(44)	東, 宮里正広	27	137(110)	149	88(65)	東27, 福本真徳
12	100(71)	111	71(44)	底径87, 空家		128(101)	143(110)	79(65)	"
13	123(96)		87(65)	住む	28	90		69	東28, 安里つ ぎお (計測不能)
14	120(93)	132	82(61)	東271, 赤嶺慎弘				60	
	68	74	46(32)	"	29	84(63)	96	77	東29, 空家
15	87	93	60(44)	空家	30	81(62)	90	64(47)	東15, 安里寛吉
16	85(62)		70(56)	東266, 吉本朝光		103(76)	116	68(53)	"
	85(61)		67(48)	"	31	101(82)	114(84)	70(48)	玉寄(空家)
17	111(84)	124	74(54)	東265, 吉本清弘		68(50)	75(57)	52(39)	"

	口 径 (内径)	胴 径 (内径)	高さ (深さ)	備 考		口 径 (内径)	胴 径 (内径)	高さ (深さ)	備 考
32	116(84)	124(95)	75(58)	底径100, 新城(空家)	52	72(53)		55(39)	空屋敷
33	74(56)	82	56(41)	新城マツ		78(60)		61(42)	〃
	83	88	54(49)	〃	53	102(77)	112	76(54)	東80, 空家 (1石2斗入)
34	67(56)	75	(34)	東10, 新里正一		78(56)	88	66(47)	〃
	89(65)	98(74)	(44)	〃	54	120(89)	126(98)	75(57)	底径93, 東78, 山城ヤス (2石2斗入)
35	90(67)	98	60(67)	空家	55	117(91)	125	78(54)	与那(空家)
37	114(84)	123(96)	67(50)	東31, 糸洲善太郎		112(87)	117	69(52)	〃
	92(70)	98	60(50)	〃	56	115(91)	127	75(52)	東67, 山城三郎
38	103(74)	112	68(47)	東32, 玉寄(空家)		90(69)	101	62(38)	〃
	80(61)	92	62(44)	底径70, 〃	57	119(93)	135(114)	77(50)	空家
39	114(82)	120	67(50)	東33, 安里		83(60)		73(53)	ワレ
	95(75)	108	72(54)	〃	58	121(100)	130	70(54)	東56, 山城繁雄
	86(65)		64(46)	〃	59	98(76)	108	75(57)	東55, 豊村幸徳
40	76(56)		52(41)	底径60, 空家	60	108(80)	118	63(46)	東69, 新里太郎
41	96(77)	104	67(43)	空家		128(94)	134	75(57)	(1石8斗入)
42	82(62)		70(47)	新城, 空家		117(94)	128	72(56)	(2石入)
	91(65)	97	56(40)	〃	61	103(86)	113	66(48)	東54, 喜屋武
43	72(54)	82	54(39)	上原, 空屋敷		124(100)	136	74(53)	〃
44	85(64)		58(43)	〃	62	130(102)	140	85(65)	東50, 福本敏雄
45	92(68)	104	61(44)	東46, 赤嶺カメ	63	約80			東49 仲宗根カメ
46	76(59)	82	64(47)	空家		約80			(計測不能)
	67(54)	75	45(39)	〃	64	84(60)		72(52)	空家
47	123(96)	133	73(50)	セメント補修, 空家	65	86(62)	98	68(46)	東76, 新城トヨ
48	78(61)	86	54(38)	空家		82(61)	90	63(50)	〃
49	126(96)	136	78(60)	東63安里, 空家	66	109(84)	117	82(62)	東74 安里(貸家)
50	104(81)	116	72(49)	東87, 上原芳子	67	139(105)	145	79	東72, 新城清
	84(64)		67(44)	〃					(2石4斗入)
51	84(67)		46(31)	ワレ, 東82 又吉ヨシ子		111(83)	117(97)	70(50)	〃



(5) 図 2 のトゥージ



(6) 今は庭水入れとして

一覧表No.56



(7) 苔むして

一覧表No.55



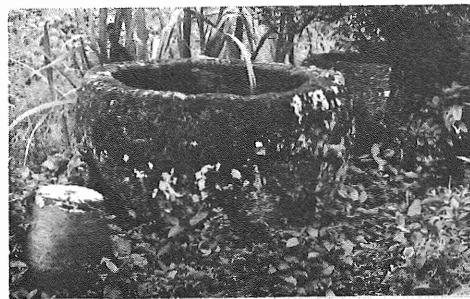
(8) 雑草におおわれ

一覧表No.15



(9) セメントで修理

一覧表No.47



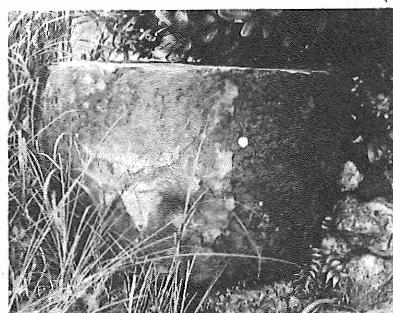
(10) かつての繁栄を物語るように

一覧表No.57



(11) 庭の片隅でひっそりと

一覧表No.25



(12) 新里氏が語ったトゥージ